写真を解凍する

作家
大竹昭子
おおたけ　あきこ

Essay　時の調べ

2020年、コロナ感染拡大で戦々恐々としているさなかに、名の知らないオランダのアーチスト・ユニットから、ある展示のために私たちの撮った人物の写真に物語を書いてもらう人を求めている、その役をあなたにお願いできないか、という思いがけない依頼が舞い込んできた。人に会えず、家にこもりきりの時期だったから、その話を聞いて窓がぱっと開いて新鮮な空気が流れ込んできたような気持ちになり、お引き受けしたのだった。

それから1年間ほどオランダから届く人物写真を元にストーリーを考えるというのをつづけ、『いつもだれかが見ている』という単行本になったところである。

写真の内容は事前に明かされなかったから、画像ファイルを開いた瞬間は、えっ、この写真に?! と頭のなかが真っ白になった。

ところが、そこに写っている人物の表情や周囲にある物、これが撮られる前後の時間や、フレームの外にある空間などを想像するうちに、人物が動きだして潜在意識のなかに潜んでいる物語に呼びかけ、一篇のストーリーができあがっていったのだった。

写真は絵画とちがい、カメラの前に現実に人がいなければ写らない。どんなカットもかつてその場所にその人物がいて、何らかの行動を起こしたという生々しさを孕んでいる。それを再生させるのは、言うならば、シャッターが下りたときに瞬間冷凍されたものを解凍するのに似ている。うまみが逃げないように丁寧に見ていくと、さまざまな発見があって実におもしろい。

そうとわかると、このことをほかの人々とシェアしたくなり、写真のワークショップというのを思いついた。スマートフォンが普及して撮ることのハードルは一気に下がったが、撮れたものを見るという行為が追いついていないように感じていた。溜まっていくだけで見られていない写真を、多くの視線にさらして解かしてみると、人と写真の関係はもっと楽しく豊かなものになるのではないだろうか。

ワークショップでは参加者に前もって提出してもらった写真を見ながら、気がついたことをみんなで言葉にしてゆく。口で説明すると単純すぎて気が抜けるほどだが、これが実に楽しく、大興奮するのだ。

たとえばこんな写真が提出されたことがあった。レストランのテーブルに男が座っている。テーブルの上には紙類が散乱し、彼は熱心になにか書きつけている。向かいの席にはだれかいるらしく、おしぼりや食べかけのパンケーキの皿が見えるが、人物そのものは写っていない。室内の雰囲気は明らかにファミレスだ。ではどこのファミレスだと思いますか? と問いかけたとたんに、会場はどっと湧いて、どこかに証拠がないかとみんな一斉に画面に眼を凝らしはじめたのである。

京都・PURPLEでのワークショップの模様

それからはわいわいがやがや、初対面であるのも忘れて意見を交わしあった。おしぼりの使い方が乱暴だから向かいに座っているのは男性だろう、とか、写真を撮ったのはリモートで仕事していることを証拠として見せるためだ、いや、向かいの席の人とはカップルで、トイレに立ってもどってきたら、彼が一所懸命仕事しているので愛おしくなってつい撮ったのだ、などとあふれでる言葉の数々! 撮り手がその場にいることなどまったく頓着しない自由な雰囲気に、すっかり圧倒されてしまった。

このとき、だれが撮ったのかということは忘れて、みんな写真と一対一の関係に浸り切っていた。観察力と想像力をフル稼働させて写真を生き返らせようとする熱意に、その場ぜんたいが包みこまれていたのである。

写真装置は自然現象を応用したもので、極端に言えば人がいなくても写ってしまう。ただそこにあるだけの写真が冷たく、無表情なのはそのためだ。そのようにして一旦、非人間的な世界に収まってしまった像を人間の側に引きもどすには、写真と目を見交わす必要があり、それが充分になされたとき、ごくふつうの写真が唯一無二の忘れがたい1点として人々の記憶に刻まれる。なんと不思議なことだろう。

略歴
作家。小説、エッセイ、ノンフィクション、批評など、ジャンルを横断して執筆。
写真関係の著書に『彼らが写真を手にした切実さを』(平凡社)、『ニューヨーク1980』(赤々舎)、『出来事と写真』(畠山直哉との共著)(赤々舎)、『この写真がすごい』(朝日出版社)など。〈写真をよく見るためのワークショップ〉を各地で開催中。情報はTwitterとFacebookで